

健康で豊かなスポーツライフを実現しようとする子どもの育成

小 学 校 廣岡 哲也、濱田 圭、藤田 奈美
研究協力者 日野 克博、糸岡 夕里（愛媛大学）
東村 英憲（愛媛県教育研究協議会）

1 主題設定の理由

豊かで便利になった現代社会に生きる私たちは、生活のあらゆる場面で体を動かすことが少なくなっている。特に、今の子どもは、都市化や少子化などの影響を受け、遊びの三間（時間・空間・仲間）が減少して運動不足になっていること、運動をする子どもとしない子どもの二極化、体力の低下傾向などが指摘されている。体育科の授業の中でも、運動技能に大きな差があったり、意欲的に運動に取り組むことができない子どもがいたりする。そういった背景には、私たち教師が、子どもに運動の本質的な楽しさを十分に味わわせられていないこと、運動に対する自信を持たせられていないこと、失敗して友達から責められるかもしれないといった不安を感じさせてしまっていることなどがあるのではないだろうか。そういったことに鑑みると体育科の授業が負う責任は大きい。一方で、「友達に教えてもらったらできた！」「もっとやりたい！」このような子どもの姿や発言が見られたら、子どもは運動の魅力を感じ、仲間とのつながりの中で伸びていくことに喜びを感じている証であろう。そして、活動を通して充実感を得た子どもは、「次はこんなことをしてみたい！」と、更なる活動を求め学習空間を広げていく。それを自分たちの手で成功させた時、学びは更なる深まりを見せ、心に深く刻まれるのである。私たちは、これこそが体育科における「深い学び」を実現している姿であると確信している。

この「深い学び」を実現する過程を積み重ねていくことによって、体育科の究極目標でもある「健康で豊かなスポーツライフ」を実現しようとする力の育成につながっていくと考え、本主題を設定した。

2 子どもと共に学びをつなぐ「体育科」の授業づくり

(1) 体育科における「子どもと創る『深い学び』」

ア 子どもの心が動く教材・教具の工夫

主題設定の理由で述べた体育科における「深い学び」を実現するためには、子どもの心の動きが伴った学びである必要がある。私たちは、子どもの心が動き、主体的に活動するために、教材が持っている本質的な魅力を教師がしっかりと理解し、性差や障がいの有無、運動能力差等にかかわらず、誰にとってもやさしい運動になるように教材・教具を工夫、開発することが大切であると考え。また、子どもが関心を寄せていることや普段の遊びなどとのつながりを持たせるなどして教材との出合わせ方を工夫し、子どもの「面白そう！」「やってみたい！」という心の動きと連動させながら、「よりよく動けるようになりたい！」という自分なりの課題を設定できるようにしたい。

イ 子どもの思いや願いを受け止める単元の展開

体育科における「深い学び」を実現するには、大前提として教師が子どもの思いや願いをしっかりと受け止めることが大切である。子どもが、今どのような活動を求めているのか、どのような手立てを必要としているのか、そういったことに、教師はアンテナを張り巡らせながら単元を構想、展開していかなければならない。それを念頭に置き、子どもとの対話や子どもからの提案、授業を振り返った体育ノートなどを大切にする。子どもが感じている課題が次の学習課題になったり、やってみたいと思ったことが実現したりするこ

とで、子どもの心は充実し、自分の思いや願いが実現できたという達成感や満足感を得ることができるだろう。そして、子どもが教材や他者と豊かにつながるよう工夫し、次への活動を求めていけるように単元を展開していくことで、「子どもと創る『深い学び』」を実現していくことができるのだと考える。

(2) 子どもの学びをつなぐ指導の手立て（学習材・他者・自分自身）

ア 学習材とつなぐ手立て（主に「見方・考え方」との関連）

体育科の見方・考え方について、以下のように学習指導要領に書かれている。

運動やスポーツを、その価値や特性に着目して、楽しさや喜びとともに体力の向上に果たす役割の視点から捉え、自己の適性等に応じた「する・みる・支える・知る」の多様な関わり方と関連付けること。

「出会い」「挑戦」「感動」（体育科では、子どもの様態や心情に鑑みて「追求」を「挑戦」、「振り返り」を「感動」と表現している）それぞれの場面で、見方・考え方を働かせる場面を設定することで、運動やスポーツを多様に楽しむことができるようにする。この際、子どもの思いや願いを受け止めながら場面を設定したり、運動やスポーツとの多様なかかわり方を教師が意味付けをしたりすることで、より意味のある活動にすることができる。そして、そういった活動を繰り返し行うことで、子ども自らが見方・考え方を働かせ、多様に運動を楽しむことができるようになっていくのだと考える。

2年次研究で第2学年において実践した、ネット型につなげるためのゲーム「コロコロバレー」を例に挙げる。コロコロバレーとの「出会い」の場面は、大学生の紹介動画を見た時である。紹介動画を見た子どもは意欲十分。その後、試しのゲームをした。初めての試合なので、当然うまくいかない。そこから子どもは「大学生の動画みたいにスムーズに攻撃したい！うまくなりたい！」という思いを持って練習に励むようになった。「挑戦」の場面では、求められる技能を可能な限り少なくしたことで、技能面で上達してきたことを実感しやすくなったり、子ども全員が、バレーボールの特性である「受けて-整えて-打ち込む」の本質的な楽しさを存分に味わうことができたりした。そこから、「コロコロバレーはみんなで楽しめるスポーツ」という意識も芽生えた（知る）。そういったこともあり、「感動」の場面である単元終末には、卒業する6年生に挑戦してみたい」と言い始めた。そこで教師からは、「挑戦するに当たって何が必要か」を問うたところ、子どもから対決の司会進行や試合の審判、対決を盛り上げるための応援等が挙がり、必要感を持って準備を進めていった。対決当日、子どもは、準備してきたことを存分に発揮し、成功させることができた。

単元が終わった後の子どもの振り返りからは、運動を「する」だけでなく、応援すること（みる）や審判をすること（支える）で大会ができたことから、そこに楽しさややりがいを感じた子どももたくさんいた。

以上のように、見方・考え方を働かせる場面を意識して単元を構想し、子どもの気付きや思いを受け止めながら展開することで、子どもにとってその学習材とより深くつながることができ、心に深く残るものとなると感じている。

イ 他者とつなぐ手立て（主によりよい「対話」の在り方・方法）

他者とつなぐ手立てとして、子どもが対話に必要感を感じ、自然と仲間とつながることができるように学習環境を整える。例えば、仲間とかかわりながら解決することができるような学習課題を設定したり、一人の力だけでは解決できず、みんなの力を合わせないと解決できないような運動場面を設定したりする。子どもが自然と仲間とのつながりを求め

るような工夫をすることで、「みんながいたからできた！」「一緒に運動するって楽しい！」という思いを引き出しながら、できるようになる喜びを感じることができるようにしたい。

ウ 自分自身とつなぐ手立て（主に自覚のための自己評価の方法、過去・現在・未来）

体育科では、単元を通して体育ノートを使用し、子どもが自分自身の学びについて振り返ることができるようにする。「出会い」の場面では、新しい単元が始まるに当たり、まず過去の学習を振り返るようにする。体育科においては、必ずしも全ての子どもが新しい単元に対して前向きに捉えているわけではないだろう。ただ、そういったことも含め、子どもの思いを丸ごと受け止めて単元を構想し、単元が終わる頃に全ての子どもに「楽しかった！」「またやりたい！」という前向きな思いを持てるようにすることが教師の重要な役割だと感じている（過去の自分自身とのつながり）。

「挑戦」の場面における体育ノートには、授業で学んだことの他に、①自分の成長、②友達とのかかわり、③次への目標とそれに対する自分なりの解決方法等を書くようにし、単元内においても、前時まで（過去）と本時（現在）とを比べた自身の成長、次時以降（未来）の自分はどうか等振り返ることができるようにする。さらに、毎時間、数値による自己評価（資料１）を行い、体育ノートに蓄積していくことで、これまでの自分の学びを振り返りながら単元を進めていくことができる。

また、教師は、体育ノートの記述や自己評価の数値の変化としっかり向き合うことで、次の授業での指導に生かすことができ、子どもの思いや願いをより深くくみ取った授業を目指すことにつながると考える（現在の自分自身とのつながり）。

評価方法：それぞれの質問に対して「はい・どちらでもない・いいえ」で自己評価する。（毎時間）

1	楽しかったですか。
2	今までできなかったこと（運動や作戦）ができるようになりましたか。
3	自分のめあてに向かって何度も練習できましたか。
4	友達と協力して、なかよく学習できましたか。
5	友達とお互いに教えたり、助けたりしましたか。

資料１ 自己評価カード

そして、「感動」の場面では、「出会い」「挑戦」の場面で考えたことや身に付けたことを振り返り、それらを生かして、子どもの思いや願いを叶えることができるような運動の場（例えば、リーグ戦や発表会、交流対決等）を設定する。また、「仲間と協力して課題を解決することのよさ」を感じることができるようにすることで、「努力してできるようになって嬉しい」「仲間と一緒に頑張ったからできた」「次の活動もみんなで頑張りたい」というような、運動に対する前向きな思いにつながり、次の活動に自信を持って取り組んでいくようになる。ひいてはそれが、「健康で豊かなスポーツライフ」へとつながっていくのだと考える（未来の自分自身とのつながり）。

(3) 「子どもと創る『深い学び』」における（指導者）評価

「出会い」「挑戦」「感動」の学習過程における指導と評価を次のように行う。

※（下線部は、「見方・考え方」にかかわる箇所）

	「深い学び」の実現につながる姿（●）	「学習材」「他者」「自分自身」をつなぐ指導の方針（○）	主に評価する 三つの資質・能力【・】
出 合 い	● <u>運動との多様なかかわり方を理解し楽しもうとしている。</u>	○ <u>運動には多様なかかわり方があることを紹介する。</u> (学・自)	・ 過去の経験を振り返り、運動に前向きに取り組もうとしている。また、 <u>運動の行い方や運動のこつを自分なり</u>
	● 教材や教具、題材と出合	○ 友達と思い切り体を動かし、	

	うことで、「分かるようになりたい」「友達と一緒に頑張りたい」という思いや願いを強くしている。 ● 自分に合った課題を設定し、学習の見通しを持って取り組もうとしている。	やさしい運動（遊び）の場を設定する。（学・他） ○ 運動に自信を持ち、学習の見通しを立てて活動するために、体のどこを意識したら運動しやすいか等、子どもが困っているポイントや子どもに合った運動のこつを見定めて声を掛ける。（学）	に理解し、次時以降の見通しを持とうとしている。 【主体的に学習に取り組む態度】
挑 戦	● <u>運動を「する」楽しさだけでなく、「みる・支える・知る」の視点からも運動とかかわる楽しさを感じることができている。</u> ● 学習資料の提示やスモールステップでの学習によって、「これならできそうだ」という思いを持続させながら夢中になって活動に取り組んでいる。 ● 何度も挑戦することによって少しずつ「できるようになってきた」という充実感を得ることができている。 ● 友達との励まし合いやアドバイスの交換、応援し合うことによって、「自分は人に受け入れられている」「人の役に立っている」という思いを持つことができている。	○ 運動に多様にかかわったり、友達と自然に伝え合ったりできるような場を設定したり、声掛けをしたりする。（他） ○ <u>運動を「する」楽しさを味わうために、こつや作戦、動きづくりのヒントとなるような声掛けをしたり、学習資料を提示したりする。（学）</u> ○ <u>運動が「できるようになる喜び」を味わうために、よい動きを称揚したり、最後まで粘り強く運動できるよう励ましたり、よりよい動きになるよう助言したりする。（自）</u> ○ よりよく個人やチームの課題を解決するために、具体的な手立てや条件を示す。（他）	・ 子どもが自分なりにこつを意識して運動し、技能を身に付けることができる。 【知識・技能】 ・ 自分なりに、個人やチームの課題を捉え、その解決に向けて、個人やチームで考えを出し合い、工夫しながら活動する。【思考・判断・表現】 ・ 授業中、友達にこつを教えたり、自分の考えを伝えたり、友達の意見を受け入れたりしている。また、体育ノートでの振り返りでそういった記述が見られる。 【思考・判断・表現】 ・ <u>運動を「する」楽しさや「できるようになる喜び」を十分に味わうことができている。</u> 【主体的に学習に取り組む態度】
感 動	● 「努力したらできた」「友達と一緒にしたらできた」「みんなとだから頑張れた」という気持ちになり、次への意欲や自信を持っている。 ● <u>体育科で学んだことが、休み時間や学校外での活動でも行われている。</u> ● 体育ノート等に、成長の喜びや達成感を味わっている発言や記述がある。	○ 学習したことを想起させるような言葉掛けをしたり資料を提示したりする。（自） ○ 学習したことを生かして活動できる運動の場を設定する。（学・自） ○ 振り返りの場で蓄積した動画を見せることで、自分や友達の成長を実感できるようにする。（他・自） ○ <u>体育科で身に付けたことが実生活や他教科等で生かされるように教科等横断の単元構想を工夫する。（自）</u>	・ チームや学級で、既習の学習を生かしながら次の学習に向けての工夫を考えようとしている。 【主体的に学習に取り組む態度】 【思考・判断・表現】 【知識・技能】 ・ <u>「みる」「支える」の視点で、運動とかかわる楽しさを感じている。</u> 【主体的に学習に取り組む態度】

これらのことを意識しながら実践を重ねていくことで、子どもの心が動き、子どもが学習材や他者、自分自身とのつながりを大切にできるような「深い学び」を実現していきたい。

（濱田 圭）

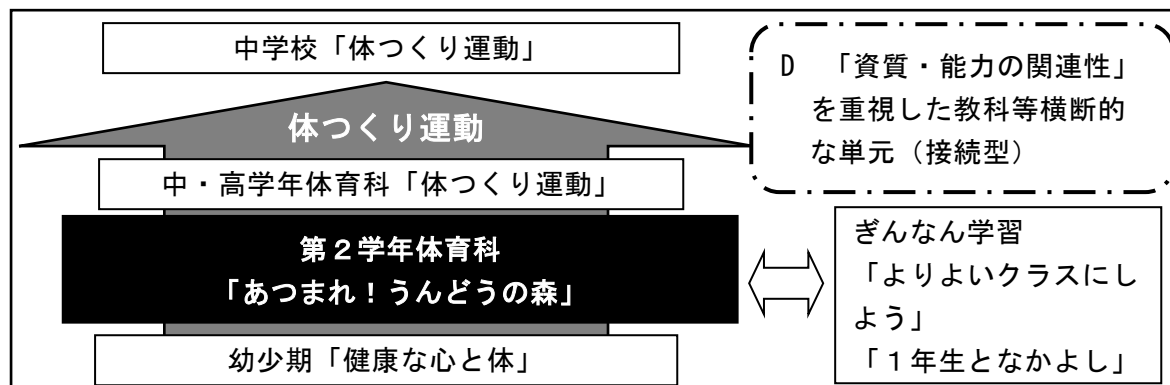
3 実践事例 1

第2学年

「あつまれ！うんどうの森 -体づくりの運動遊び-」

体育科（＋ぎんなん学習）

【単元全体構想について】



本単元は、D「資質・能力の関連性」を重視した教科等横断的な単元である。子どもたちはこれまで幼児期からいろいろな遊びの中で十分に体を動かす経験を積み、小学校低学年での体づくりの運動遊びにつなげてきた。この幼少期の集大成とも言える2年生のこの時期に、体育科では体づくりの運動遊びを通して、基本的な体の動きを身に付け、運動の楽しさや喜びに触れていく。一方、ぎんなん学習では体育科での学びを伝え合うことで自他の成長を喜び合う学習、そして、1年生と交流する楽しさを味わう学習とを関連させることで、運動の習慣化や互いに協働して生きていく共生社会への実現につながる可以考虑、構想した。

一般的に、体づくりの運動遊びは、自己の心と体の状態に気付いたり、みんなでかかわり合ったりするとともに、楽しみながら基本的な体の動きを身に付けることをねらいとして行われる運動であり、「体ほぐしの運動遊び」と「多様な動きをつくる運動遊び」で構成されている。

「多様な動きをつくる運動遊び」は、最終的に子どもたちの体力の向上へとつなげるために行われる運動遊びで、「体のバランスをとる運動遊び」「体を移動する運動遊び」「用具を操作する運動遊び」「力試しの運動遊び」で構成される。他の運動領域では扱いにくいこれらの運動を通して、基本的な体の動きを総合的に身に付けることが将来の体力向上につながる大切な運動である。

本学級の子どもたちは、どの体育的活動においても大変意欲的に取り組んでいる。その意欲は体育科の授業内に留まらず、運動会での全員リレーや学級での運動イベントなど他の行事でも熱心に練習するほどである。子どもたちはチームや学級がより楽しめるように、その都度、対話を重ねながら規則や場の工夫をしたり、伝え合ったりする経験を積んできた。このような運動へのかかわりを学級全体で互いに励まし伝え合い続けてきた結果、共に運動にかかわる絆が芽生えてきている。また、これまでの体育的活動を通して、それぞれの運動が持つ本質的な楽しさを味わうことができるようになってきている。

そこで、本単元ではペアやグループで活動を進めていく。これは意図的に一人ではできない運動遊びを取り入れることで、更に友達や仲間とかかわることの楽しさや協力することのよさに気づき、仲間と共に「できるようになる喜び」をより感じることができるようにする。また、本単元では、伝承遊びや多くの運動遊びを取り入れていく。こうすることで、子どもたちの挑戦意欲をかき立て、基本的な動きの習得を確かなものとし、中学年での「体づくり運動」の学習にスムーズにつなげていきたい。

本単元の終末では、ぎんなん学習「よりよいクラスにしよう」「1年生となかよし」へと学習空間を広げ、自分たちが工夫した運動遊びを1年生に紹介する。その際、共に運動する楽しさを味わいながら、基本的な動きのこつを1年生に伝えることで、互いに豊かなスポーツライフの素地づくりへつながると考える。

【単元（体育科）のねらい】

- いろいろな動きの運動遊びの楽しさに触れ、その行い方を知るとともに、体のバランスをとったり、体を移動したり、用具を操作したり、力試しをしたりすることができるようにする。
- 体をほぐしたり多様な動きをつくったりする遊び方を工夫するとともに、考えたことを友達に伝えることができるようにする。
- いろいろな動きの運動遊びに進んで取り組み、決まりを守り誰とでも仲よく運動をしたり、場の安全に気を付けたりすることができるようにする。

【単元の展開】（全11時間）

場面	子どもの課題意識と主な学習活動	評価の規 準	時間
出 合 い	いろいろな運動を通して、友達と体を動かそう。 ○ 学習の見通しを持ち、学習の進め方や準備・片付けの仕方を知る。 ○ 体ほぐしの運動を通して、運動の楽しさや心地よさを味わう。	● 体ほぐしの運動遊びに進んで取り組みようとしている。 ● 運動をする場や用具の使い方などの安全に気を付けている。	2
挑 戦	四つの動きにチャレンジしよう。 ○ 幼少期で身に付けたい動きを取り入れながら、四つの「多様な動きをつくる運動遊び」に挑戦する。 ○ 習得が十分でない動きを、友達と教え合ったり励まし合ったりしながら行う。 四つの動きを更に高めよう。 ○ 習得した動きを基に、新たな「運動遊び」の仕方を検証し、紹介し合う。 ○ 友達や1年生へ「運動遊び」の伝達方法を考え、交流会の準備を進めるとともに、その運動ができるようになる。	● 体を動かす楽しさや心地よさを味わいながら、多様な動きをつくる運動遊びをする。 ● 自己の体力に応じて更なる動きの習得に向け、習得方法を工夫する。 ● 仲間と協力して運動したり、運動遊びの行い方を工夫したりすることができる。 ● 考えた運動遊びを実際に行ったときの気付きや楽しさを仲間に伝えることができる。	6
感 動	1年生を「2花うんどうの森」に招待しよう。 ○ 活動してきたことを生かして、「2花うんどうの森」を企画し、運営する。	● 運動遊びの楽しさや心地よさに気付き、更に運動遊びを工夫しようと、進んで活動に取り組んだり、その楽しさを伝えようとしていたりしている。	3

【単元の実際】

（第1時）「出会い（主に学習材とつなぐ）」の場面

「出会い」の場面において、子どもたちは特定の技能を必要とせず、誰もが楽しめる「伝承遊び」を体験した。扱った伝承遊びは、「言うこといっしょ、やることいっしょ」「かもつ列車」「グリコじゃんけん」「かごめかごめ」などで、どれも手軽に行うことができ、なおかつ、仲間を必要とするものである（写真1）。子どもたちはこれらの伝承遊びを通して、楽しみながら基本的な体の動きを身に付けることができた。また、運動前、気持ちがすっきりしていな

かった子どもが、運動後には気持ちがすっきりとしたという子どもが体育ノートから多く読み取ることができた。さらに、授業後には早速、階段で「グリコじゃんけん」をしたり、教室で「はないちもんめ」や「だるまさんが転んだ」をしたりする姿が多く見られた。そして、そこには次第に仲間の数も増え、運動の輪が広がっていった。

子どもの体育ノートの記述より（抜粋）

- ・友達が「一緒にやろう！」と言ってくれて、嬉しかった。
- ・友達のまねっこをして、動きが得意になった。
- ・みんなと運動して、楽しかった。
- ・オニが来そうな時、うまくよけることができた。
- ・方向転換ができるようになった。
- ・友達と仲よく運動できた。



写真1 伝承遊び「かごめかごめ」

（第3～8時）「挑戦（主に他者とつなぐ）」の場面

「挑戦」の場面では、まず、子どもたちに「友達といろいろな動きにチャレンジしよう！」と挑戦意欲をかき立てるようなめあてを設定した。こうすることで、子どもたちの意欲の向上と基本的な体の動きを身に付けることの意識付けを図った。四つの多様な動きをつくる運動遊びをそれぞれ十分に経験できるように内容を二つに分け、前半に「体のバランスをとる運動遊び」「力試しの運動遊び」、後半に「体を移動する運動遊び」「用具を操作する運動遊び」を扱うようにした。始めはそれぞれの運動遊びを試しに行いながら、自身の体力を確認していった。そして、それぞれの運動遊びについて目標をスモールステップで設定し、自身のペースで運動遊びに挑戦できるようにした。子どもたちは、チェックシートを用いて次々と運動遊びにチャレンジしていた。チェックシートを見て、自身の得意な動きに気付いたり、仲間の得点を集計し周りに伝えたり、みんなで楽しむ姿が見られた。どの運動遊びも、一人ではできない課題を設定することで、仲間とのかかわりも多く見られた。また、全てのステージまで達成した子どもは、仲間のメンバーにコツを教えたり、更に難しいルールを考えたりしていた。このように、運動遊びの経験を重ねるごとに、子どもたちは運動への自信を持ち始めてきた。

それぞれの運動遊びを十分に味わった後、子どもたちに「更に楽しい『うんどうの森』にする方法」を問うと、「新しいルールを考える！」という返事が返ってきた。そこで、めあてを「楽しい『うんどうの森』にするために、動きを工夫しよう！」と設定した。ここでは「運動遊びの工夫の視点」として、①コース、②方向、③姿勢、④距離、⑤人数、⑥道具の6点を明確にし、確認した。子どもたちは友達と相談しながら六つの視点から一つを選び、さらに運動遊びを楽しむ方法を探っていった。そして、自分たちが考えた遊びがうまくできなかった時には、周りの子どもたちから動きのコツを伝え、それを試みる姿がよく見られた。それぞれの工夫した運動遊びに子どもたちは興味津々で次々とチャレンジしていた。棒キャッチでは、最後に11人で全員がキャッチ成功すると、体育館は歓声の渦で盛り上がった（写真2）。このように、自分が考えた遊びを伝え合うことで、運動遊びの楽しさを感じ、意欲の向上が図れた。

子どもの体育ノートの記述より（抜粋）

- ・友達と助け合って、動きができた。
- ・1年生の頃はそんなにできなかった動きが、今日ではできたら嬉しかった。
- ・次は全部クリアしたい。
- ・友達から「上手い！」と言われて嬉しかった。
- ・今度、クラス全員で棒キャッチを成功させたい。



写真2 棒キャッチ成功の瞬間

（第9～11時）「感動（主に自分自身とつなぐ）」の場面

ぎんなん学習「1年生となかよし」で、子どもたちは「1年生にとってどんな『うんどうの森』にしたいか」話し合った。子どもたちは「みんなが楽しめるようにしたい！」「1年生がうまくできるように動きのこつを教えたい！」と1年生と共に楽しめる運動遊びを考えていくこととなった。子どもたちは1年生との交流に向け、遊びの場づくりや景品づくりに熱心に準備を進めていった。準備を進める中で、子どもたちから「1年生にチェック表を配り、運動遊びが達成できたらシールを貼るようにしよう！」と意見が出始め、すると、「達成できたらシールを貼るとなると、達成できなかった1年生は運動遊びの楽しさを味わえないから、体験したらシールを貼るようにしよう！」と誰もが楽しめるルールを考えていった。

当日は、会の進行や準備体操といった全てのことを自分たちで役割分担しながら運営していった。運動遊びでは、動きのこつを伝えながら手本を見せる子ども、手を差し伸べ動きの補助をする子ども（写真3）、時間を測ったり得点を数えたりする子ども、1年生が運動遊びを達成したとき一緒に歓声を挙げ喜び合う子どもなど、1年生と運動遊びの楽しさを十分に味わうとともに「する」「みる」「支える」それぞれの立場で運動とかかわっていた。こうした中で、子どもたちは1年生を1年前の自分と置き換え、今の自分と比較し、互いの成長を実感し、喜び合うことができた。また、運動遊びの楽しさを伝えたことの自信、1年生の友達に喜んでもらえた達成感、またやってみたいという未来への希望が伺えた。このように、誰もが楽しめる運動遊びを工夫しながら見だし、運動の楽しさを自分だけにとどめず、異学年の友達にも広げることができた。子どもたちの表情や体育ノートからは満足感や達成感が多く見られた。

子どもの体育ノートの記述より（抜粋）

- ・1年生と一緒に運動遊びができて、とても楽しかった。
- ・1年生に見本を見せるとき、自分自身もうまくできるようになっていたと感じた。
- ・1年生を喜ばせることができ、大成功！
- ・今度、6年生も招待したい。
- ・これからもいっぱい運動をしたい！



写真3 1年生を補助する2年生

【単元の成果と課題及び次年度の実施に向けて】

- 伝承遊びは、運動が得意な子どもにとっても、苦手な子どもにとっても、みんなが一緒に楽しめる内容になり、共生の視点に立った授業展開をすることができた。
- 挑戦の場面でスモールステップによる目標設定を行ったことは、子ども一人一人の挑戦意欲をかき立て、意欲の向上につながった。また、どの運動遊びも一人ではできない課題を設定することで、仲間とのかかわりも広がった。この結果、動きの習得にもつながった。
- 1年生に運動遊びを紹介することは、1年生にとっても運動遊びのバリエーションが増えるなど、1年生と2年生の双方にとって、よい学びとなった。
- 動きの習得が難しい子どもには、ただ遊ぶというのではなく、動きのこつを探るような教師の声掛けをしていく必要がある。また、イメージしやすいように、まねっこ遊びも取り入れるなど、運動の得意な子どもも苦手な子どもも共に楽しめる雰囲気づくりが求められる。
- ☆ 低学年の運動遊びの時期において「欲求充足機能」だけにとどまらず、「必要充足機能」も高められるような指導の工夫、中学年へのスムーズな接続ができるような運動領域の系統性を意識した単元全体構想の研究を進める。
- ☆ 子どもが仲間と自然に課題解決に迫れるような声掛けや発問計画の研究を進める。

（廣岡 哲也）

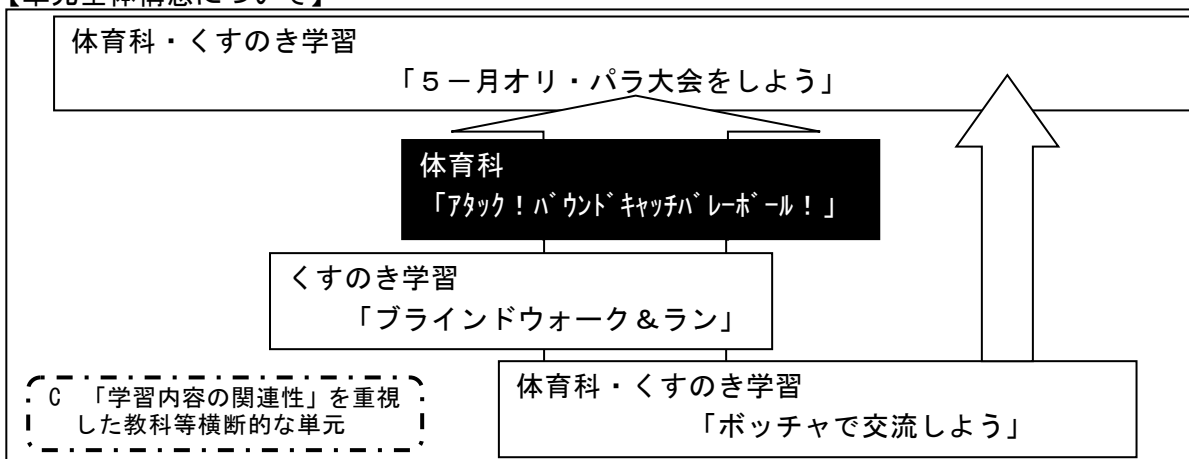
実践事例 2

第 5 学年

「アタック！バウンドキャッチバレーボール！-全員攻撃・全員守備-」

体育科（+くすのき学習）

【単元全体構想について】



学習指導要領の改訂により、共生の視点に立った授業づくりが注目されている。これからの社会では、年齢差や性差、障がいの有無、運動能力の高低に関係なく誰もが一緒になって運動に親しみ、参画することが目指されている。体育部では、パラスポーツを積極的に取り入れると共に、「誰にとってもやさしい運動にする」「運動の本質的な面白さを味わわせる」の2点を大事にすることで共生の視点を意識してきた。それによって、誰でも一緒にスポーツの楽しみや喜びを味わうことができ、ひいてはそれが、子どもの健康で豊かなスポーツライフを実現する力につながると言える。本単元では、体育科で学んだことをくすのき学習と関連させて学びの空間を広げ、教科等横断的に実践した。

一般的に、小学校体育でのバレーボールでは、ミスによる得点や失点、意図的ではなく、偶然性の高い得点などでゲームが進んでいくことが多い。しかし、これではバレーボールの本質を十分に楽しんでいるとは言えない。ネット型ゲームの本質的特徴は、「攻防の中で、ラリーを絶ち、得点を重ねていくこと」、そして「意図的な守備によって相手の攻撃を防ぐこと」である。つまり、ラリーを絶つための攻め方を考えると共に、相手の攻撃を防ぐための位置取りについて考えていくことが重要であると言える。子どもたちにはそういったバレーボールの本質的な楽しさを味わわせたいと考え、本単元では特に「意図的な攻守によるゲーム」に主軸を置いて単元を展開することにした。

今回扱う「アタック！バウンドキャッチバレーボール！」は、ソフトバレーボールを簡易化したもので、①レシーブはワンバウンドキャッチであること、②セッターはパスされたボールをキャッチして投げ上げることの2点によって「受けてー整えてー打ち込む」というバレーボールの特徴を主体とした得点を重ねやすいゲームができたり、チームの作戦が実践しやすくなったりする教材である。そして、バレーボールをする際に大切にしたいキーワードを「コミュニケーション」「コンビネーション」「フォーメーション」とした。

単元が進んでいく中で、子ども達は「空いているスペース」に目が向き、そこを攻めるようになるであろう。そうすると、次は守り方を考える。そこで、動きが制限される「シッティングバレーボール」を取り入れる。その中で、フォーメーションの大切さに気付き、アタックバウンドキャッチバレーボールのゲームがより質の高いゲームになるようになることを期待している。更には、シッティングバレーボールを通して、子どもたちのパラスポーツへの理解を深めるとともに、運動をより多様な視点で楽しむことができるようなきっかけをつくりたい。

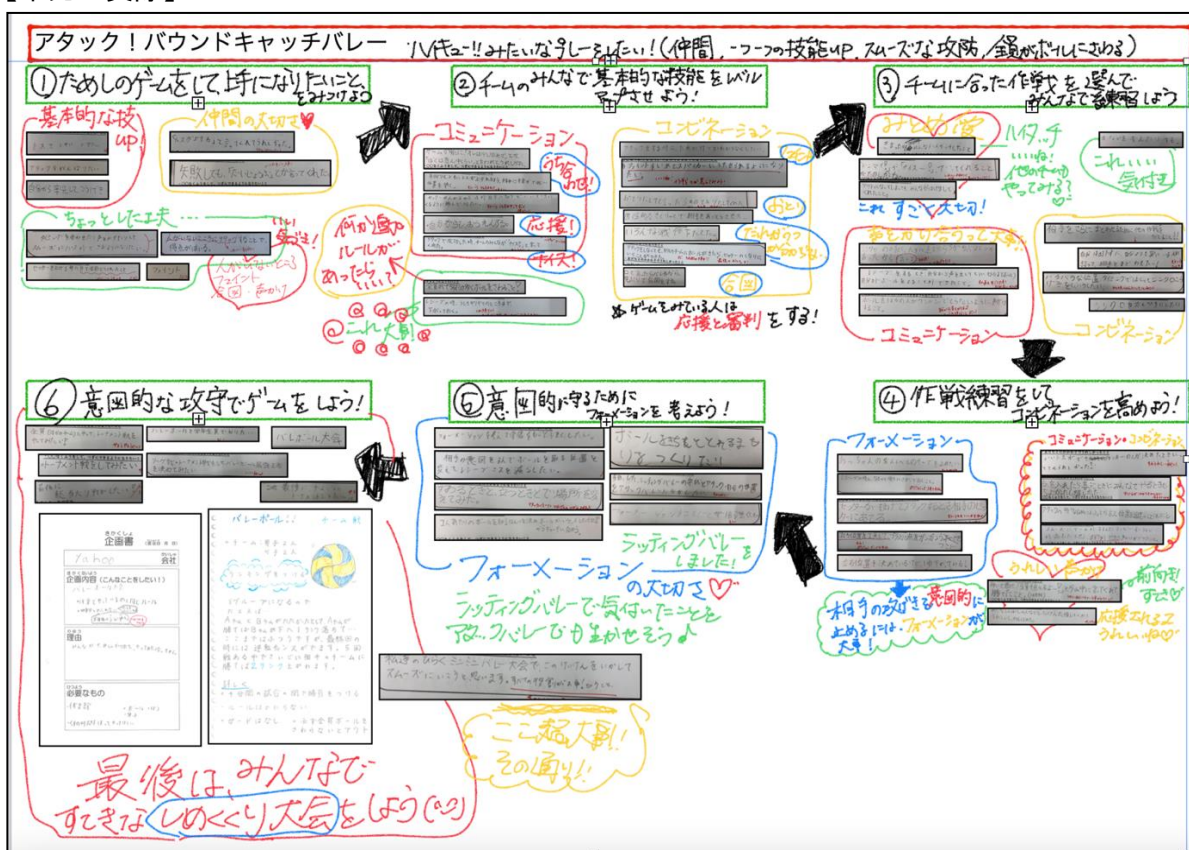
【単元のねらい】

- ボール操作とボールを持たないときの動きによって、チームの連携による攻撃や守備をすることができる。
- 全員が楽しむためのルールを工夫することや、自己やチームの特徴に応じた作戦を立てたり、見直したりするとともに、考えたことを仲間に伝えることができる。
- 仲間と協力して互いのよさを認め合いながら、積極的に取り組むことができる。

【単元の展開】（全8時間）

場面	子どもの課題意識と主な学習活動	評価の規準	時間
出会い	バレーボールがどんなスポーツかを知ろう。 ○ 試しのゲームをして、課題を出し合う。 ○ 大学生による戦術動画を視聴する。	● 安全面やルール、運動の行い方等を理解し、課題を把握している。	1
挑戦	バレーボールの戦術をチームで練習しよう。 ○ 基本的なボール操作を練習する。 ○ チームごとに戦術練習をする。 ○ シットイングバレーをして、守備練習をする。	● 基本的なボール操作を身に付けている。 ● 仲間と協力して戦術を身に付けている。 ● ポジショニングを意識して活動している。	5
感動	5-月オリパラ大会をしよう。 ○ 練習してきたことを生かしたり、新しい運動に挑戦したりする。	● 仲間のよさを認め合いながら、積極的に活動に取り組んでいる。	2

【単元の実際】



資料1 「振り返り共有」

単元を通して、子どもの振り返りを全体で共有していった（資料1）。子どもが感じたことや課題を共有することで、みんなで次のめあてを決めて進めていくことができた。これを教室や授業中のテレビ画面に常掲しておくことで、いつでも単元の流れを確認することができ、めあてを共有しながら単元を進めていくことができた。

（第1時）「出会い（主に学習材とつなぐ）」

子どもたちに人気のあったバレーボールを題材にした本を意図的に教室に置いておいたり、教育実習の大学生（バレーボール部）と一緒にバレーボールの紹介動画（写真1）をつくったりしたこともあり、子どもたちの心はバレーボールに対して前向きになり、憧れを抱くようになっていった。その心のまま突入した単元であったが、試しのゲームでは当然うまくいかなかった。ルールもよく理解できていなかったし、声を出し合えずにお見合いをしたり、セッターのトスに誰も反応ができなかったりする場面が多く見られた。一方で、試しのゲームが終わった後、すぐに「昼休みに体育館で練習したい！」という声が挙がり、意欲の高まりを感じた。また、子どもの振り返りを見てみると、次への意欲を感じる記述が多かった（資料2）。



写真1 「紹介動画視聴」

- ・失敗しても「大丈夫」といってくれてうれしかった。
- ・タイミングを合わせるために、声かけをしてスムーズにできるようになりたい。
- ・相手がいないところに打つと得点が入りそう。
- ・自分から率先して攻撃に参加したい。
- ・フェイントとかつかってみたい。
- ・みんなでつないで点を入れたらうれしかった。

資料2 「子どもの振り返り①」

（第2～6時）「挑戦（主に他者とつなぐ）」

大学生にお手本動画をつくってもらったものを視聴した。ドリル練習は①キャッチ&スロー ②トス&アタック。戦術練習は、①「時間」を意識した「時間差攻撃」、②「空間」を意識した「ブロード攻撃」、③「仲間」を意識した「シンクロ攻撃」の3種類を紹介した。

休み時間や授業の準備が終わった後等、空いた時間を使って自主的に練習する子どもたちが増えていった。授業外でもバレーボールに親しむほど、仲間との一体感を得やすい本単元に魅力を感じているのだと実感した。子どもの心が動き、仲間と共に運動に夢中になって練習しているので、練習したことがゲームの中で生きてくる場面が増えていった（写真2、3）。

そして、攻め方が上手になってきたことで、次は守り方に目が向くようになっていった。そこで動きが制限されるシットイングバレーボールを紹介した（写真4）。シットイングバレーをすることで、「コートの中を空いているところ」に目がいくようになっていたり「動きが緩やかになること」で、考える時間が増えることなどに気づき「アタックバウンドキャッチバレー」にも生かそうという姿が多く見られた（資料3）。



写真2 「戦術練習」



写真3 「チームで動きを確認」



写真4 「シットイングバレー」

- ・練習をして、アタックのとぶタイミングがわかった。
- ・審判のときとかに、たくさん応援してくれてうれしいし、がんばれた。
- ・「ドンマイ！」とか「ナイス！」と言ってくれるのがうれしかったし、たのしかった。
- ・セッターが背中番号（作戦の）を覚えてくれたのがよかった。
- ・相手の意図を読んで、守備位置を変えてレシーブミスが減らしたい。
- ・シットイングバレーの守備とアタックの自分の位置をアタックバレーに生かしたい。

資料3 「子どもの振り返り②」

子どもたちには、6時間目が単元の最後だと伝えていた。そのため、これまで考えてきたことや身に付けてきたことを全部出し切れる時間にしようと思気込んで臨んでいた。最後の振り返りを聞いていると、初めはできなかったことがだんだんできるようになっていったことに喜びを感じている子どもや、仲間と一緒に取り組んできたことに楽しさを感じている子どもが多かった。また、記述の「できるようになったこと」の項目に「仲間との絆が深まった」と書く子どもも多く、子どもにとって、「仲間と一緒にできるようになる喜び」を感じることができた学習であったと考える。

単元の締めくくりとして、「バレーボール大会を開きたい」という意見が多数挙がっていたので、子どもたちが企画・運営できるようにし「する・みる・支える・知る」の見方・考え方を働かすことができるように締めくくり、子どもの胸に深く刻まれる学びにすることにした。

以下、翌日の日記の一部である（資料4）。

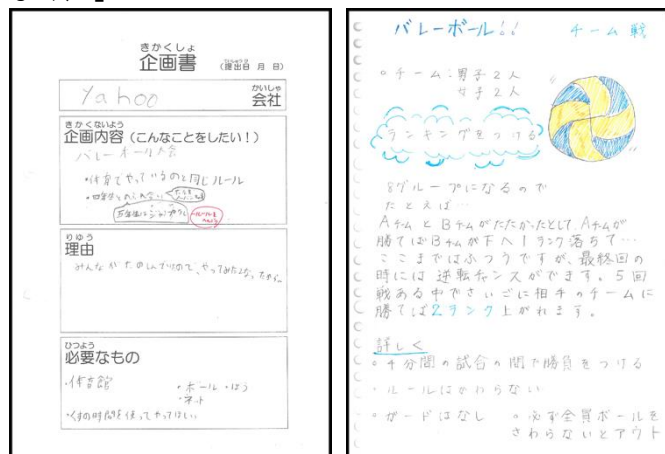
今日の2時間目体育の公開授業がありました。バレーボール最後の日だったので気にせずいつもと変わっていませんでした。ゲームをして、やっぱり相手チームには勝てなかったけど、最後の最後までチーム4人ではげましあえてよかったです。
「いよいよ！」 今日はまちにまった公開授業の日でした。今までやってきたことを出し切るぞ！と思って朝学校に来ました。一番最初の時を振り返れば、私のアタックもぐだぐだ。ボールパスもおそい。ダメダメでした。でも、だんだん回数を重ねていくうちにアタックはほとんど得点になり、ぎりぎりのボールもすばやくキャッチできるようになりました。今日、公開授業のゲームは全勝！とてもうれしくてハイタッチしました。いい思い出です。これぞ「超」えました！
今日はバレー授業の最後の日でした。最後の2ゲームは、最後だから気をひきしめてがんばろう！と思っていたのですが、逆に最後というのが足かせになって体が思うように動きませんでした（泣）でも、仲間がはげましてくれました。ナイスフォロー！
「最後のバレー授業」 今日公開授業が終わり、バレーの単元が終わりました。ぜんぜん勝てなかったチームにあと2点差までおいつめられたのでうれしかったです。また、大会で勝てたらいいです。

資料4 「子どもの振り返り③」

（第7・8時）「感動（主に自分自身とつなぐ）」

教師の見立てとしては、「挑戦」の場面の終盤に、子どもの充実感が満たされ次への活動を求めてリーグ戦やトーナメント戦、異学年との対決等を企画すると想定していた。しかし子どもたちは教師の予想を大きく上回り、単元序盤の時点で「最後はリーグ戦をしたい」「他の学年を招待して対決したい」という企画を考えてきた（資料5）。それだけ、子どもたちにとって楽しさを感じ、「もっとやりたい！」「こんなことをしてもっと楽しみたい！」と心が動く単元になっていたということが分かった。

リーグ戦をするに当たり、子どもの振り返りの中に「（審判、応援）どの役割も大事！みんなで分担して進めたい」という記述があり、それを学級で共有した。企画してくれた子どもたちを中心にリーグ戦の運営を通して、それぞれの役割の大切さを改めて感じ、運動やスポーツをするには必要不可欠なものであることも知ることができた。子どもたちは運動を多様に楽しむことができ、単元を終えた。単元を終えた後も、昼休みにバレーをする等、子どもの心に深く刻まれる学びとすることができたと感じている。



資料5 「バレーボール大会企画書」

【単元の成果と課題】

- 誰にとってもやさしい運動にしたことで、運動に前向きに取り組むことができ、子どもの思いや願いに沿った展開にすることができた。また、充実感を得た子どもは学習空間を広げていき、単元終末に自分たちでバレーボール大会を何度も開くなど、子どもの心に深く刻まれる学びとなった。
- バレーボールの本質的な魅力は味わわせることができた一方で、更に深めていくために必要である「意図的にずれを作り出すこと」について、どこでどう気付くことができるようにするかを考えていかなければいけない。

【次年度の実施に向けて】

子どもの実態に合わせて、ノーバウンドにしたり、第一触球をキャッチではなくレシーブにしたりすることができる。一方、そうすることでゲームの展開も大きく変わっていくと考えられる。子どもの実態に合わせて、ゲームの展開を想定しながら進めていきたい。(濱田 圭)

4 研究のまとめ

(1) 子どもの学びをつなぐ指導の手立てについて

ア 「出会い」の場面

「誰にとってもやさしい運動になること」「教材の本質的課題をつく運動になること」の2点を意識して、教材・教具の工夫を進めてきたことで、全員の子どもが、できる喜びを感じたり、「もっとやりたい!」という前向きな気持ちを持つことができたりした。教材・教具づくりには教師の思いを込めることで、「早くやりたい!」「もっとやりたい!」という気持ちを高めることができた。また、見本動画を見せることで、「あんなふうになりたい!」という意欲を引き出すことができ、それが子どもにとってのゴールイメージにつながった。

イ 「挑戦」の場面

子どもたちが必要感を持って対話をしていくために、学習課題の工夫や一人では解決できないような学習の場を設定したりした。教材との出会いに心が動いた子どもたちは、活動に夢中になる。夢中になった子どもたちは、教師が話合いの時間を設定するまでもなく、仲間と対話に必要な感を感じながら、仲間と一緒に課題を解決していこうとする姿がたくさん見られた。

ウ 「感動」の場面

「出会い」「挑戦」の場面で教材の本質的な面白さや仲間と一緒に活動していくことの面白さを存分に感じた子どもたちは、リーグ戦や発表会、他学年との交流対決等、更なる活動の場を求めていった。そういった子どもの思いや願いを受け止め、次の活動への希望や展望を持つことができるように、教科等横断的に締めくくりをすることで、体育科だけでなく学級集団づくりにも大きくつながる活動となった。

(2) 子どもと創る「深い学び」における評価について

ア 指導者評価の手立て

「出会い」「挑戦」「感動」それぞれの場面における、「深い学びにつながる姿」「指導の方針」「主に評価する資質・能力」を表にまとめ、どこで見方・考え方を働かせることができるかを示すことができた。

イ 自己評価の手立て

毎時間の記述、数値による自己評価を行った。教師としては、子どもの思いや求めていること等を集約し、授業改善に生かすことができた。子どもにとっては、仲間の思いや課題に感じていることを共有することができた。

(3) 考察

共生の視点を意識し「すべての子どもにとってやさしい運動であること」、「運動の本質的な面白さを感じることができる教材であること」を大切にすることで、満足感や充実感を感じ、子どもの心に深く刻まれる学びとなっていくことを感じた。また、それを積み重ねていくことが、豊かなスポーツライフにつながっていくということを改めて感じた3年間であった。時期研究以降においても、今期研究で意識してきた共生の視点を大切にするとともに、一層教材の持つ魅力を探っていくことで、子どもたちにより本質的な面白さを味わわせることができるようにしていきたい。(濱田 圭)

5 研究協力者から

附属小学校での授業実践、授業研究の根底には、「子どもファースト」の考えがある。「誰にとってもやさしい運動になるように」「子どもの思いや願いをしっかりと受け止めて」「全ての子どもに『楽しかった!』『またやりたい!』という前向きな思いを持たせるように」といった言葉に、子どもの心に寄り添う信念と情熱が感じられる。

今期の研究期間には、「新学習指導要領の完全実施」「新型コロナウイルス感染症の拡大」「東京オリンピック・パラリンピック競技大会」「GIGA スクール構想の推進」など、様々な社会状況の変化があった。それらの影響は少なくなかったが、よりよい体育授業を追求するにあたって、「子どもと創る」という柱(研究主題)はブレることなく、子どもと共に学びをつなぐ「体育科」の授業づくりが展開された。

「する」「みる」「支える」という様々な形での運動やスポーツへの「自発的な」参画や、「出会い」「挑戦」「感動」の場面を通して運動やスポーツの多様な「楽しさ」や「喜び」に触れることは、心をより豊かなものにする「スポーツの価値」の原点をつながるものである。また、ボッチャ等を通して異学年、異校種とつながる取組は、これからの持続可能な社会や共生社会の実現に向けて、スポーツの多様性や可能性を感じることができた。

今、これからのスポーツ推進の在り方を示す第3期スポーツ基本計画が議論されている。そのなかで、国民が「する」「みる」「支える」ことを真に実現できる社会を目指すために、新たな3つの視点があげられている(第3期スポーツ基本計画 中間報告 令和3年12月20日)。

- ① 社会の変化や状況に応じて、既存の仕組みにとらわれずに柔軟に対応するというスポーツを「つくる/はぐくむ」という視点
- ② 様々な立場・背景・特性を有した人・組織が「あつまり」、「ともに」活動し、「つながり」を感じながらスポーツに取り組める社会の実現を目指すという視点
- ③ 性別、年齢、障害の有無、経済的事情、地域事情等にかかわらず、全ての人がスポーツにアクセスできるような社会の実現・機運の醸成を目指すという視点

これらの具体の姿や詳細な内容は今後詰められていくと思うが、「スポーツをつくる/はぐくむ」「つながりを感じながらスポーツに取り組む」「全ての人がスポーツにアクセスできる」といった視点は、附属小学校の研究で取り組んできた授業づくりそのものである。これからの体育授業の方向性を示すものになっているものと言える。

最後に、3カ年の研究をふりかえり、体育科として研究に取り組んだ成果は、現実の子どもの姿に他ならない。健やかな心と体を育むための前向きな気持ちと自他への思いやりの心は、子どもの体育授業での愛顔(えがお)として表現されていた。今後も、「子どもファースト」の考えのもと、次代を担う子どもたちのために、附属と大学が連携して、体育学習を通じて「健康で豊かなスポーツライフを実現する力の育成」に取り組んでいきたい。(日野克博、糸岡夕里)